

RSNA 2023



第109回北米放射線学会 (RSNA 2023) が、2023年11月26日 (日) ~ 30日 (木)、米国イリノイ州シカゴ市のマコーミックプレイスで開かれた。“Leading Through Change” というテーマの下、米国のほか日本も含めた国と地域から4万661人も放射線診療にかかわる臨床家・研究者らが集った。世界では、新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) のパンデミックが収束に向かう一方で、地政学的リスクが高まっており、先の読めない変化が続いている。医療においても、人工知能 (AI) の進化など大きな変革期を迎えている。このような時代に放射線診療にかかわる人々には何か求められるのか。変化を先取りし、リードするために参加者一人一人が知見を深める機会となったマコーミックプレイスは、5日間の会期を通じて熱を帯びていた。

Leading Through Change

変化を先取りし、 リードしていくことが重要

RSNA 2023 のテーマ “Leading Through Change” は、参加者だけでなく、放射線診療にかかわる多くの人にとって強いメッセージになったであろう。2023年5月、世界保健機関 (WHO) は、3年以上にわたり続いた COVID-19 の緊急事態の終了を宣言した。日本国内でも、同じく5月に2類感染症から5類感染症へと移行。COVID-19 の流行は収束に向かっている。しかし、2022年に始まったロシアによるウクライナ侵攻に加えて、2023年10月にはイスラエル・パレスチナ紛争が勃発し、世界経済への影響も生じており、暗い影を落としている。さらに、ほかの国と地域でも地政学的リスクが高まっている状況にある。一方、技術の進歩は、社会を大きく変えようとしている。2022年11月に米国 OpenAI 社が発表した大規模言語モデルを用いた生成 AI 「ChatGPT」 は、瞬く間に社会現象となった。生成 AI を用いた製品や



Howard B. Chrisman, M.D. が Mark Twain が残した格言をテーマに講演

サービスが普及する一方で、その存在を脅威ととらえて規制を設ける動きも広がっている。まさに、世界は予測困難な VUCA (Volatility, Uncertainty, Complexity, Ambiguity) 時代にある。このような時代を生き抜くためには、変化を先取りし、リードしていくことが重要である。RSNA 2023 のテーマからも、それが読み取れる。

AI など革新的な技術を取り入れ 明るい未来を手中に

初日11月26日に、Arie Crown Theater で行われた President's Address and Opening Session も、変化を先取りして、それを受け入れてリードしていくことを訴えるものであった。今大会の大会長を務めるノースカロライナ大学の Matthew A. Mauro, M.D. は、President's Address として、大会テーマ “Leading Through Change” について講演した。Mauro 大会長は、放射線診療を取り巻く環境が変化していると指摘。それを受け入れていくことが重要だと述べ、“The Six Forces” を取り上げ、変化を受け入れて成功させるためのビジネスモデルを示した。また、Mauro 大会長は、放射線診療がこれまで新たな技術を積極的に受け入れ、画像診断、低侵襲治療、放射線治療を変革して、医療をリードしていたと強調。これからは AI に代表される革新的な技術を取り入れていくことで、明るい未来を手に入れることができるとまとめた。

次いで行われた Opening Session では、ノースウェスタンメディカルグループの Howard B. Chrisman, M.D. が登壇。米国の作家、



大会長の
Matthew A. Mauro, M.D.

Mark Twain が残した格言として知られる “History Never Repeats Itself, But It Does Often Rhyme” をテーマに講演した。Chrisman 氏は、放射線診療が AI などの技術革新により大きな変革期にあり、放射線診療にかかわる人々はそれを受け入れることが重要であり、そのための準備が求められると述べた。さらに、Chrisman 氏は、これまでの放射線診療を振り返り、PACS の登場が大きな影響を与えたとして、AI も同様の変化をもたらすと説明した。その上で Chrisman 氏は、放射線診療にかかわる人々は、AI に対して「恐怖」を抱いてはいけないと指摘。AI を活用することで、より良い放射線診療を提供できるだろうとまとめた。

Plenary Session は 7セッションを用意

RSNA は前回から会期を短縮して5日間の日程となった。今回のプログラムとして、Plenary Session は President's Address and Opening Session を含め7セッション設けられた。11月27日には、

Elizabeth S. Burnside, M.D., M.P.H.による“Leading Through Technology : Valuing Artificial and Human Intelligence”とImage Interpretation Sessionが行われた。11月28日には、呼吸器内科医で、Amazon PharmacyのChief Medical Officerも務めるVin Gupta, M.D.が“The Future of Healthcare Delivery : Considerations for Patients and Providers”をテーマに、デジタル技術により変わるヘルスケアの未来を展望した。11月29日には、ゲームショウ形式の“Oncology Imaging and Interventions : The Radiology Jeopardy”と、Jocelyn D. Chertoff, M.D., M.S.の“Understanding and Revitalizing the Radiology Workforce”が用意された。さらに、最終日の11月30日には“RSNA/AAPM Symposium : Together We Can Make A Difference”が設けられた。

また、Scientific Paperは850題以上、Scientific Posterは1400題以上、Education Exhibitは1600題以上、Educational Courseは300コース以上となった。

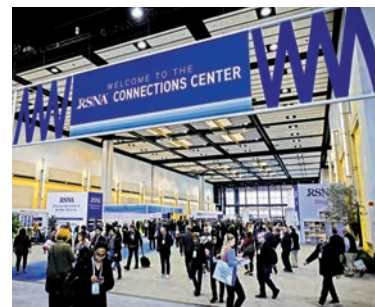
日本人の発表3題が Magna Cum Laudeを受賞

RSNAには2023年10月20日の時点で、世界160の国と地域に4万8110人以上の会員が所属している。会期中には、会員だけでなく、非会員やTechnical Exhibitの出展企業関係者など、米国外から大勢がマコーミックプレイスにやってくる。日本からも多くの人々が現地に赴くだけでなく、バーチャルミーティングにアクセスしている。また、例年多くの臨床家・研究者がabstractを登録している。11月29日には、採択された発表の中から受賞が公表された。

日本の発表では、井上明星氏（滋賀医科大学）らの“The Role of CT in Non-occlusive Mesenteric Occlusion for Diagnosis, Therapeutic Strategy, and Patient Management”（EREE-50）と、加納進太郎氏（東京大学）らの“Syphilis : The Re-emerging Great Mimicker—A Case-based Review from Head to Toe”（MSEE-19）、森 紘一朗氏（がん・感染症センター都立駒込病院）らの“Progressive Multifocal Leukoencephalopa-



Lakeside Learning CenterではEducation ExhibitとScientific PosterのほかにCase of the Day, Learning Center Theater, Art of Imagingなども併設



リニューアルされたLakesideのRSNA Connections Center

thy (PML) : A Thorough Overview from Traditional to Contemporary Findings, Including Inflammatory Subtype, IRIS, Drug-associated, and Asymptomatic Cases”（NREE-21）が、最も評価の高いMagna Cum Laudeに選ばれた。

その次に優れた発表に与えられるCum Laudeは、7題が受賞。高橋宏彰氏（メイヨークリニック）らの“Evolving Role of Conventional Imaging for Prostate Cancer in the Era of PSMA PET”（GUEE-84）、木村浩一朗氏（東京医科歯科大学）らの“Insights into Urethra : A Diagnostic Approach and Comprehensive Guide to Multimodal Imaging in Urethral Lesions”（GUEE-93）、伊東浩太郎氏（日本大学松戸歯学部）らの“Imaging of Post-dental Treatment : What Radiologists Need to Know in Common and Advanced Dental Procedures”（HNEE-77）、仲谷 元氏（東京大学）らの“Diversity of Epstein-Barr Virus-associated Diseases”（MSEE-55）、五明美穂氏（杏林大学）らの“Frontier Technology in Non-Invasive Vascular Imaging ; Arterial Spin Labeling-Based Non-Contrast MR Digital Subtraction Angiography on Cerebral Diseases”（NREE-100）、齋田 司氏（筑波大学）らの“Piecing Together the Puzzles : Imaging Diagnostic Approach to Genetic Diseases Affecting the Female Reproductive Organs and Beyond”（OBEE-73）、福井利佳氏（東京女子医科大学附属足立医療センター）らの“Optimal Acquisition and Reconstruction Techniques of Coronary CT Angiography : Current Status and Trends

Over the Past Decade”（PHEE-26）が選出された。

Technical Exhibitは 前を上回る691社が参加

放射線診療にかかわるモダリティやデジタル技術などが披露されるTechnical Exhibitは11月29日までの4日間にわたって、ホールA（サウスビルディング）とホールB（ノースビルディング）で行われた。前回の644社を上回る691社が参加。初出展企業数は133社となり、こちらも前回の124社から数を伸ばした。出展企業数の増加もあり、展示面積は39万8400平方フィート（約3万7000m²）を記録した。特設展示として、AI Showcase, 3D Printing and Mixed Reality Showcase, Innovation Theater, First-time Exhibitor Pavilion, Educators Row, Recruiters Rowも設けられた。

* * *

RSNA 2023は、前を上回る4万661人が参加したこともあり、COVID-19のパンデミック以前の活気を取り戻しつつあった。マコーミックプレイスに集った参加者がこれからの放射線診療の変化を先取りし、リードしていくことを期待したい。なお、バーチャルミーティングは米国時間2024年4月30日（火）正午まで視聴可能である。RSNA 2024は、マコーミックプレイスを会場に、2024年12月1日（日）～5日（木）の5日間の日程で行われる。

*太字および（ ）内は演題番号

* Technical Exhibitの詳細は、2月号別冊付録「RSNA 2023ハイライト」およびインナビネット「RSNA 2023スペシャル」（<http://www.innervation.co.jp/report/rsna/2023>）をご覧ください。